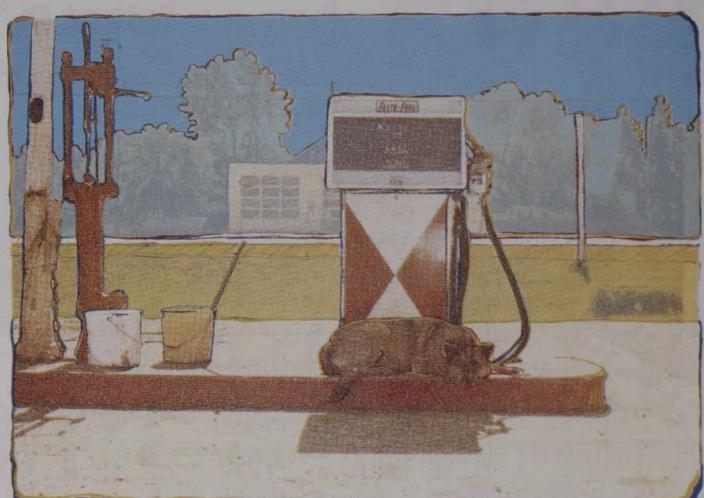




ウェイン・イーストコット「HAKONE 2」(シルクスクリーン, 1980年)



ウィリアム・ラブチャック「Neepava Noon II」(シルクスクリーン, 1979年)

は独自のスタイル開発を説く一方、日本式チームワークを紹介した。一九六一年には石型やステンシルを用いたワークシップがもう一つ、ポヴェンゲニツークに出来た。問題や悩みは山積みされていたが、結局忍耐が実を結び、やがて次々と版画センターが作られてゆく。まずベーカー湖のホルマンに、そして一九七三年にはパンクニルツィングに。こうした版画家の不断の努力の末、今日イヌイット版画はユニークな表現形式として認められている。イヌイット民族は、自分達の歴史を記録、保存したり表現したりすることを可能にした版画を、喜びをもつて制作している。

仕事場は他にもある。例えば版画制作の共同ワークショップである。版画家グループが団結し、スタジオの空間や設備を共同使用するのだが、異なるニーズや制作姿勢に応えるため、一九七三年モントリオールで「グラフィア」が発足した。これは言わば共同体で、メンバーは平均十人前後である。グループを作る一番の理由は、空間や印刷機の共同使用という経済的利点であり、その他の共通項は、版画制作の各過程を自らの手で行うといふことぐらいしか見つからない。

美術学校の版画部も良き仕事場だ。アルバータ大学でワルター・ジュールの主宰する版画部の他、カルガリー大学、バ

ンフ美術学校、ウインザー大学、バンクーバー美術学校等にある。こうした版画部と共に、自前で印刷機等の設備を揃える資力を持つ版画家達の個人スタジオも優秀で、多作の版画家が育つ恰好の仕事場となっている。また、大半の版画家が学校に関係していることも、興味をひく事実である。

都市での美術活動から遠く離れた北極圏のイヌイット(エスキモー)の間で、革アップリケや象眼細工、象牙や石膏を使った彫刻などの伝統工芸を母体とした版画技術が台頭してきた。一九五八年の第一回版画展以来、イヌイットの版画を愛好する人々は増加の一途を辿っている。

日本での伝統的版画制作技術から多くの学びとれるに違ないと確信したヒューストンは、一九五八年から五九年まで日本に滞在し、一時平塚運一に師事した。イヌイットの地に帰つてから、彼はケープ・ドーセットの版画家達に技術面で

はじめてイヌイットに版画を奨励した功労者は、ジェームズ・ヒューストンである。木版技法(北極圏では木材は皆無に等しく、磨いた石材を用いた)から始めて、次に乾燥したあざらし皮を代用したステンシル・カットへと進んだ。一九五八年にはケープ・ドーセットの部落に、版画のワークショップを作るところにまで漕ぎつけた。イヌイットの版画家達が大勢いる。

出会いこそ、明らかにアーティストの願いである。事実、そうした出会いは双方にとって、感動に満ちた経験の場なのである。(GASTON PETIT 版画家) (季刊「版画芸術」一九八〇年冬号より 載載。)